

社会人一年目の彼は、仕事のちょっととした案件確認も兼ねて、女上司の浅沼と宅飲みの最中だった。

「……あふう、うふふ、このお酒甘くて美味しいね」「

サワーに口をつけ、可愛らいため息を吐く。

普段は大人しめな浅沼であったが、相手が彼であるためか、あるいは酔いが回つているためか、少しだけ饒舌気味であった。仕事の話から私生活の話まで、二人は着実に親密になっていった。

彼にとつても、美人で憧れの上司である浅沼と呑めるのは大変喜ばしいことだつた。ころころと笑う彼女には胸をときめかせずにはいられなかつた。

そんな中、和やかなその空気を裂く出来事が……。

それは彼が同僚の佐野がゴルフカートで取引先の社長を軽くはねた話をしている最中だつた。当人にとっては人事ではないが、傍から聞いてこれほど面白い話はなかつた。浅沼も手を叩いて笑つていた。

「アハハ、何それ、スゴイね。アハハハ」

その時、お腹に力が入つてしまつたのか——。

ぶうづつ！

「ハツ！」

甲高いその異音が、浅沼の臀部から響き渡る。もし彼女が笑い続けていれば、何かのラップ音と誤魔化せたかもしれないが、浅沼は放屁音を最後に笑い声を止め、明らかに『やつてしまつた』という表情を作つた。これでは自分がよからぬことをしたと喧伝しているようなものだつた。

彼もその可愛らしい音はしっかりと耳にしていた。浅沼が放屁してしまつたのだ、と彼は理解した。

「……き、聞こえ、た？」

浅沼はその台詞がまた墓穴であるとも気づかず、そう訊ねた。

彼は「何がですか?」とどぼけようとも考えたが、「こちらは」「ちらりで『』の人、やらかした」という少し強ばつた表情を作つてしまつていたため、ここで嘘を吐くのは得策ではないと考え、静かに頷いた。

「『』、ごめん……笑つたら、その……出ちやつて……」

顔を真っ赤にさせながら、もじもじと謝る浅沼。彼も本気で恥ずかしそうにしている彼女に何と言つてあげればいいか分からず、気まずい空気が広がる。

と、同時に尻から放たれた屁も広がっていき——

「……あ」

浅沼は何かに気づいたような声を漏らした。

彼女の漏らした放屁は、自分の鼻元にまで漂ってきた。しかも、その臭いといつたら、鼻先で直接かまされたように錯覚するほどの、濃厚なものだったのだ。

当然、浅沼の放った屁の香りは彼の鼻腔を容赦なく刺激していた。ネットリとして濃厚な、腐卵成分を多量に含んだような不健康そうな臭い。仕事にかまけて私生活を疎かにした結果が、その屁に如実に現れていた。

臭いに若干顔を引き攣らせる彼を見て、浅沼は激しいショックを受け、体を震わせた。

「……」「めんなさい、本当に」「めんなさい……おなら、臭くて……」

浅沼は田を潤ませながら、女性としてはこれ以上ないほどに哀れな謝罪をした。ここで彼は屁のあまりの臭さに顔を引き攣らせていたことに気づき、己の浅はかさを恨みに恨む。何故、平氣な顔ができなかつたのか、と数秒前の自分をぶん殴つてやりたかった。

もはや室内の空氣は両方の意味で最悪となつていた。気まずさとオナラの臭さがハーモニーを奏でるように、室内を席巻していく。静かだつた空氣清浄機が異常な音を立てて動き出したことで、より空氣は最悪になつた。

こんなことと、この楽しい宅飲みをぶち壊すわけにはいかない——

錯乱した彼は、酔いも手伝つてか、元の空氣を再建するための暴挙に出る。

彼は浅沼の座布団近くに思い切り顔を近づけ、タイトスカート周辺の空氣を鼻で思い切り吸い込んだのだ。

「ちよつ、な、なな、何してるので、君つ！」

浅沼が驚愕するのも無理からぬ話である。鼻元に漂うガスの、それ以上の臭気を孕む尻近くの空氣を嗅ぐなど、正氣の沙汰ではない。自分のオナラで彼の頭がおかしくなつてしまつたのではないか、と浅沼は本氣で心配した。

しかし、彼はいたつて真剣であった。尻近くの空氣を臭うことで、浅沼のオナラが臭くないということを証明し、また楽しい呑みに戻りたかった。彼はただ純粹にそれだけを考えていた。

しかし、その道はかなり険しいようだつた。

予想はしていたことではあつたが、尻周りの空氣は彼女のガスによつて目一杯汚染されており、その臭いは田に染みるほどだつた。鼻にもわあつと堂々と侵入してくる腐敗ガスに、思わず鼻を摘みたくなる。視界が黄色く染まるように感じられるほどのたまご屁に、脳髄をかき回される心持ちだつた。

しかし、彼は浅沼の生み出した最悪のため息を臭い続けた。そして、悪臭物質のほとんどを体内に取り込んだ後に、浅沼の放屁がまったく臭くない」とを伝えた。「そんな……やめてよ、もういいよ。だって……自分でも臭いと思つたんだよ、私のオナラ。もう……無理しなくていいから」

彼は本当にまったくこれっぽっちも臭くないと、「とを懸命に主張したが、浅沼は悲しそうに目を伏せるばかりだった。

これではまだ足りない、とそう判断した彼は、今度は浅沼の太ももを掴んで無理矢理尻を浮かせると、彼女のタイトスカートに顔を埋めた。ならば、さらに至近距離で臭つて、臭くないことを証明しようという魂胆だ。

「な、なにしてるのぉつ！ ダメえツ！」

顔を朱以上に朱に染めながら、尻にへばりつく彼を引きはがそうとする浅沼であったが、彼は浅沼の腰をがつちりと掴んで離さない。ぐりぐりと臀部に顔を押しつけて、尻の割れ目の臭いを嗅いだ——そして、目をカッと見開いた。

その臭さといったらもう、鼻をもぎたくなるほどのものだった。スカートの繊維に絡みついた濃密な屁成分が、鼻腔の吸引によって彼の鼻に勢いよく流れ込む。浅沼が美人な女性であるとは思えないほど悲惨なオナラ臭であつた。プロボクサーのストレートをモロに食らつたような錯覚に陥る。これでもまだ屁臭の片鱗ながら、恐ろしい。

それでも、彼は全力でオナラの臭いを嗅ぎとつた。鼻息を震わせながらも、可愛らしい上司のため、楽しい宅呑みのために、命を賭して闘うのだ。

「ああ、ヤダ、ヤダヤダ、もうやだあ……」

しかし、彼の予想に反して、場の空気は悪化を辿るばかりだった。自分の臀部に顔を押しつけられ、恥ずかしい臭いを嗅がれるという耻辱に、浅沼は身悶えるようにして震えた。

そんな彼女にさらなる試練が訪れる。

「うお……」「ふうううう……！」

「……ッ！」

動物の唸り声のような、重たい腹の音が鳴り響く。そして、感じる確かな膨満感。肛門にかかる圧力……。

最悪のタイミングで、浅沼は強烈な放屁欲求を催してしまったのだ。

このままでは、スカート越しであるにしても、彼の顔面に放屁を浴びせてしまう……。

「ちよ、ちよつと……君……」

もじもじとお尻を揺すらせながら、浅沼は彼の顔を最悪の危険地帯から逃がそうとする。あまり乱暴な」とすると、勢いで放出されかねないので、なるだけ静かに舌先を見せる。

しかし、彼の頭は動かない。彼は浅沼の恥を拭うべく、放屁臭の吸引に必死だったのだ。そして、どこかハイになつてゐる部分もあり、ムチムチとした尻にさらりと顔を押しつけていた。

「うなつたら直接言うしかなし……」「あ、あ、あの……」

しかし、いや言つとなると羞恥心の強い浅沼には、恥ずかしくて放屁欲求に苛まれている。「ふを発言できません。」のおお放屁すればどうなるかは分かつてしるとうのに……。

肛門を激しくノックする。

「あ……あつ、あつ……ああつ

背筋をピンと伸ばし、肛門をヒクヒクと痙攣させながら必死に放屁を我慢する淺沼。決壊の瀬戸際で、危うい綱渡りを続ける。

そこに彼の鼻が束湯を呑める

「ああッ！　あああ——ツ！」  
まるで、災厄の門を」じ開けるようにな  
るはう哉漫のうばうばうがつ。

悲痛な声と共に、浅沼の臀部から溜まったガスが噴出する——

先ほどの可愛らしい音色とは異なる、あまりに下劣で野太い音色だった。ガツボリとこじ開けられた肛門から、腸内で腐敗・発酵した大量のガスが噴出される。

その行き先は——当然、彼の鼻腔だった。

突然の爆音に驚く間もなく、彼は放屁の凶悪な熱氣とその激臭に身を激しく痙攣させた。当然の話だが、残り香を嗅ぐのと産地直送を味わうのとでは、臭いの濃さが段違ひだった。頭の中まで『腐卵』一色に染まってしまうほどの悪臭だ。

「あ、ああああ……」

....。  
残つた屁を細切れに漏らしながら、浅沼は手で顔を覆つて俯いた。後輩の顔に屁をぶちまけた恥辱に、心が裂けそうだった。人前ですらしたことがないというのに

「んうう、くわあい……」

思わずそう口に出してしまったほど、自分のオナラの臭いは強烈だった。お酒によつて腸内ガスの発酵が促進されたせいか、もしくは卵料理好きの弊害か、とてつもなく臭い。鼻の曲がりそうな臭いとはまさにこのことだった。

の比ではないだろう。

浅沼はオナラの臭さに鼻を摘みながら、恐る恐ると彼の様子を確認した。

「……？」

彼の股間が日に見えて分かるほどにもつこりと隆起していたためだ。　　性的興奮の他ならぬ証左であると。

彼自身も、なぜ自分が淺沼の放屁で興奮しているか分からなかつた。彼女の屁は臭い。いや、もう臭いどころではない。毒ガスの域に達しているとしか思えないほどの、癪猛なたまごの屁であつたはずだ。

にもかかわらず、彼のペースは硬く淫りながら先端から我慢汁を漏らしており、白濁の発露を要求していた。普通ならば萎えて然るべき奥さのはずなのに、彼の反応はその真逆であったのだ。

が、静かに響いていた。

恐る恐ると浅沼は訊ねる。

「まさか、そんな……オナラで興奮しちやつたなんて、そんな」と……  
その事実を否定したいというような口調であつたが、その反面浅沼の頬には朱色  
が差し、胸も敷しく高鳴つていた。勃起した彼のペニスにもう釘付だ。

が差し、胸も激しく高鳴っていた。勃起した彼のペニスにもう釘付けたのもはやその事実を認識されてしまった以上、彼に隠し通す手立てはなかつた。彼は素直に認めた。浅沼の放屁に興奮し、ペニスを勃起させてしまつたことを。

「そう、なんだ……本当に……」

熱い吐息を漏らしながら、浅沼は静かに唾を飲む。何かが自分の背後から忍び寄つてくる感覚がした。ひどく背徳的な何かが――

まるで、浅沼の心情を読みとつたかのように、彼女のお腹はぐるると鳴った。次なるガスが充填された、他ならぬ合図だった。

腐敗し熟成した、恥ずかしい臭いがたつぶりと詰まっているのだ。彼の性的興奮を換気するらしい、オナラが——

「……………ハア……………ハア」

羞恥と興奮が入り混れ、目を回してしまった。自分のパンストに鼻をりつけながら屁の臭いを嗅ぎ、股間にテントを張る彼があまりに愛おしく――

二二

彼の髪の毛を摑むと  
ぐいと自分の尻に押し付けたのだ

彼は突然の「」とに驚いた。自ら嗅いでいる以上、浅沼の放屁を堪能でき、なおかつ呼吸も苦しくない程度に彼女の尻に顔を埋めていたのだが、彼女の手と尻によつて急激に圧迫されたのだ。急に呼吸ができなくなり、若干のパニックに陥った。慌てる彼を見下しながら、浅沼は言う。興奮にその瞳は潤んでいた。

緊張を溶かすようになります、と息を吸い——

ぐい——と臀部を押しつけて、浅沼は思い切りお腹に力を入れた。

空爆を想起させる爆発音と共に、暴力的なガスが彼の顔面に叩きつけられた。もはや嗅ぐまでもなく浅沼のオナラは彼の鼻腔に流入し、その脅威性を遺憾なく發揮した。鼻の粘膜が焼ける感覚と同時に、今までの放屁臭をさらに更新するような腐卵臭が彼の脳を揺るがす。腸内特有の生臭さまで入り交じっているようだった。咳き込まずにはいられない臭さに、さすがの彼ももがいた。

浅沼が彼の顔面に座り込んでしまったためだ。

大胆に臀部を押しつけ、浅沼は口角を吊り上げた。幾度とない放屁で猛烈に臭くなつたお尻で思いきり後輩を踏み潰す背徳感に、ゾクゾクと身を震わせていた。尻の下で彼はもじもじともがいでいる。強烈な圧迫と屁の残り香にさわや苦しんでもいることだろう。

「のまま放屁したらいつたいどりなるだろーー

千里の堤も蟻の穴から崩れる。一度決壊した理性は浅沼の性的興奮を防ぎ得ない。「私のオナラで……くさあい屁で勝手に興奮しちゃって……。もっと制裁しなくちや、ね」

そう言いつつ、浅沼はお腹に力を込め、お仕置きといつ名の「」褒美をお見舞いた。

ぶふふすううううう　むひゅうううううすかあああああああああああああ

お腹に溜まつたガスを、部屋するように容赦なく放つ浅沼。しかも、すかし気味の強烈なヤツだ。

音に反して大量の熱風が彼の鼻腔を蹂躪する。すかしの臭さも加算された、猛烈

なたまごつ屁に、彼の体は腰を突き上げて痙攣した。

それだけ今しがた放ったオナラが凄まじい臭さだったことが分かり、妙な達成感を覚えた。もつともつと臭がらせて、辱めないと浅沼は思った。彼女の内に潜んでいたSが、顔を出し始めたようだ。

「ンフ、ふふふふ……」

清純そうな浅沼らしからぬ企むような笑みを浮かべ、彼のズボンに手をかけた。たどたどしい手つきながら、彼女はベルトを外してズボンとパンツを脱がせた。

ぼろん、と雄々しく勃起したペニスが姿を現した。

初めての生チンポに、浅沼は目を輝かせた。

「これが……チンポ……」

太くてたくましいペニスであつたが、思つたより可愛いらしく、特に抵抗感はなかつた。ひくひくと小刻みに震えるそれに、愛おしさすら感じした。

ふんふんと鼻を鳴らして興奮した拍子に——

ぶふふふふううう、ブススツ！　ぶぴいいい……

「あつ……」「

オナラが漏れた。自然と。

「やだ、出ちやつた……」

すでに何発も放屁したものだから、肛門が弛緩していたのだろう。まるで流れるよう、漏らしていた。予想外のうっかり放屁に、浅沼は頬を染めた。

彼の顔面に生温かいガスが広がる。故意であろうがそうでなかろうが、オナラの臭いは変わらない。むしろ、予兆のない放屁である分、臭さのダメージは一入だつた。パンストと下着という二枚の障壁をものともしない屁臭が、彼の鼻腔を蹂躪した。

目眩を催す硫黄臭に、彼は腰を突き上げて痙攣した。ペニスの先端から、とろりと透明な液が漏れた。

「あ、これ……」

と浅沼はペニスに顔を近づけた。そして、指先でいやらしい粘液をすくい上げると、親指と人差し指でねとおとと伸ばした。

「こ、これ、我慢汁……だよね？　す「」い興奮すると、出ちやうヤツ……」

それも、ペニスに刺激を与える前に溢れ出したのだ。未経験の浅沼であつたが、彼が大変に興奮していることは分かった。

こんなにクさい、私のオナラで――

「んつ……ふ、ふうう…………！」

変態な後輩があまりに愛おしく、胸の奥が絞られるような感覚に襲われ、浅沼は甘い吐息を漏らした。目つきはとろんとしてやらしい。

もつと……もつとイジメてやりたい――

浅沼は本能に従うままに、彼の顔を尻で激しく圧迫した。

今までわざかに呼吸の隙間が残されていたが、今度はびつちりと浅沼のお尻に埋まってしまう。パンストの纖維に口と鼻を塞がれ、一切呼吸ができない。

苦しさにパシパシと太股を叩く彼を無視し、しばらくそのまま放置し続ける。  
五秒、十秒、十五秒――

次第に彼の抵抗は激しくなり、二十秒を過ぎた頃から駄々を「ねる子供のように体をのたうたせる。

しかし、浅沼の巨尻からは逃れられない。彼女の臀部は堅牢な城門もかくやといふほどに押しても引いてもビクともしない。浅沼は彼の抵抗など歯牙にもかけないという様子で、その時がくるのを胸を高鳴らせて待っていた。

そして、酸素の不供給によつて彼の体が微かな痙攣を引き起ししたのを見計らつて――

浅沼はやつとその腰を上げた。

尻圧迫からようやく解放され、まるで地下牢から地上へ脱出できたような、彼は

そんな気分を味わつた。

そして、反射的に息を吸おうとする。欠乏した酸素を供給するべく、鼻と口の両方で。

——惨事は、その瞬間に起きた。  
「……フンソツ！」

ブバビビビビヤウハハハッ！ ブボッ！ ブピッ むすすうハハハ……！

彼の頭上に浮く尻から、くぐもつたような下品な音色が響き渡り、むわあ～とパンストや下着を物ともしない熱風が降り注いだ。

そして、それを認識する前に、彼はすでに呼吸を始めていた。

がたれ方の密着が、ハーフヒーの上に、乗力が余る。一往の馬鹿、口にし過ぎる

鼻を拭き下ろして、彼が少しの強烈な悪臭で  
今までで最高の臭さに、彼は激しく咳き込んだ。何十秒と呼吸を止めていたため  
吸い込む空気の量も尋常ではなく——同時に吸い込むガスの量も今までの比では  
なかつた。臭い屁の塊を思う存分に嗅いでしまい、目には涙が浮かぶ。  
そんな彼に追い打ちをかけるように——

「サムライ」

尻を上げた浅沼は色っぽい声を上げながら中腰の姿勢で思いきり気張り、腹部を圧迫していた。ガスをこれでもかと捻り出した。肛門から放たれたガス塊はパンストと下着を容易に通過し、次々と彼の鼻腔へと吸い込まれていった。

いないらしく、自然と呼吸を続けてしまう。放たれ続ける新鮮なガスが、凶悪な卵臭さで彼を苦しめ続けるのだ。

オナラを嗅がねば気絶してしまう。

しかし、浅沼のオナラはあんまりに臭すぎる。だけど、それでも嗅ぎたくて――

あらゆる矛盾を孕む中で、彼は苦しみ続けた。オナラの臭いに塗れながら——そ

れでもペニスは屹立していた。

ブスッブブビィー！ ブップウウ~~~~~♪すつむふ~~~~!

「……ふう」

すかし氣味の放屁を最後に、浅沼は小さく息を吐いた。

「どうやらお腹に溜まったガスを出し切つたらしい。——と思わせつつ盛大な一発が来るのでないかと疑心暗鬼になつてた彼であつたが、それはなかつた。残つたガスを吐き出そうと、浅沼の尻が震えていることからも明らかだつた。

訪れたささやかな安寧にホッと一息吐くと——

別の物が襲來した。

眼前に迫る黒いもの——

「よ、いしょっ」

可愛らしくそつ言つて、浅沼は再び彼の顔面に座り込んだ。

そして——

ぶつぶううう~~~~~すうう~~~~~かああ~~~~~

「はふぅうん……」

快感に善がるように目を細め、浅沼はふるふると体を震わせた。

なんとも淫らで悩ましい仕草ではあつたが、臀部から放たれたガスは半端ではなく臭かつた。

酸欠からのガス連発によってただでさえグロッキーだったところに、それらをさらに凌駕する猛烈なオナラを嗅がされたのだ。鼻が火傷するかと思われる熱い濃密すかしつ屁に、彼は危うく意識を失いかけた。オナラの臭さで気絶するというおよそ非現実的な状況が今までに目前に迫つていた。

「あ、あふふ、うふふふふ……」

口元に手を当て、浅沼はくすくすと笑う。もはや羞恥などという概念は彼女のなかで消え去つたようだ。オナラで彼を苦しめることに至上の快楽を見出したようである。

「むわあ～ん……」

浅沼の放つた大量のオナラが、遅れて彼女の鼻元に届いた。

浅沼は大きく鼻を鳴らして自身の放つたガスを臭う。女性としては明らかに失格

レベルの強烈な臭いが彼女の脳天を貫いた。

「ああん……くつさあ」

田元が回るほど、吐き気を催すほどに臭いオナラのはずだが、今の浅沼にとつてはなんとも芳しい香りであった。彼女は頬を染め、田元をだらしなく垂らしながら、喜々として自分の分身を取り込んだ。

「すう……こなんなくつさいの、久しぶりかもお。うふふ、じんなくさあいいオナラ、嗅がせちやつた……ふくさいオナラで、征服しちやつた……ふぐりぐりと臀部を押しつけながら、浅沼はかつてない陶酔感を味わっていた。部下にくつさあいいオナラを無理矢理嗅がせ。しかも、それで部下を快楽の虜にさせてしまっているなんて。非日常的な現実に、彼女の胸は激しく高鳴っていた。もつとだ。

もつともつと……。

だらだらと我慢汁を漏らすペニスを睥睨し、浅沼は彼に向づ。

「ねえ、我慢してるでしょ?」

浅沼の一言に、ペニスがびくと反応した。

「本当は、ち……ちんちん、いつぱいシロシロしたいんでしょ? そ、それで……い、イキたいん、でしょ?」

AVで見たような台詞を不慣れながらも口にする浅沼。普段の彼女ならば決してそのようなことは言わないだろうが、「の異常な空間が彼女を痴女たらしめていた。彼は同意するよつにペニスをピコピコ振り、我慢汁をピッピッと飛ばした。

浅沼は言つ。

「なら、私の奴隸になつて」

ギュウウウ……と尻圧を高める浅沼。

「私の言つこと、何でも聞く。仕事の件でも、プライベートの件でも、全部。その代わり」「褒美として……私の生オナラ、嗅がせてあげる。そんで、オナラ嗅いでシコシコする権利を与えてあげる。君は今日から、私のオナラ奴隸になるの。ふあふふ……嬉しいでしょ」

オナラ奴隸。

なんと快い響きだらうか、と彼は思う。浅沼の放屁を味わうためなら、なんだつて出来る気がした。しかも、生のオナラ。嗅ぎたくてたまらない。

それに、強烈な快感を浴びるように味わい、ペニスはもう限界だった。今すぐにでも射精したくてたまらない。甘美なる絶頂を経験したい。

彼は喜んでオナラ奴隸になることを志望した。浅沼の放屁のためならば、人権譲渡も厭わない。

尻の下でオナラ奴隸を志望する彼の様子に、浅沼はうつとりとした笑みを浮かべた。そして、契約完了の合図かのように……。

ぶぼおッ！ ブッブウ~~~~~ッ！ ブリッピビビイッ！

豪快な三発を彼に浴びせかけた。濃密なその黄色い空気を、彼はむせながらも懸命に臭った。奥手で可愛い上司のオナラは、こんなにも臭いのだ。

「あら、いい子。……それじゃあね

と浅沼はパンストと下着を下ろし——純白モチモチの生尻を披露させた。

た。これほど綺麗なお尻から、臭い屁が噴出されるなんて——  
浅沼の肛門は毛一つイボ一つないツルツルの綺麗な肛門であつた。奥手で纖細な  
彼女らしく、尻の奥でひつそりと窄まつているようだ。  
しかし、その姿に反して臭いは強烈。オナラの残り香が彼の鼻腔と口をむわあ～  
……と刺激した。

「……んふ」

た。

「覚悟は、いいかな？」

ゾツとするような声色で浅沼は言った。

彼はわずかに頷いて返答する。パンスト越しであれだけ臭いオナラだ。直接嗅いだらどうなるか——恐怖と好奇心と性的興奮が彼の中で渦巻いていた。

「はい、十二一ヌイ・ヌヌー、お二  
者して それは幕を開けた

そう宣言すると共に、浅沼は腹部に力を入れた。窄まっていた肛門は背伸びをするように口を尖らせ、その先端から——

猛烈な毒ガスを噴射させた。

放されたオナラは問答無用で彼の鼻腔に侵入を遂げ、フィルターによって濾過されていない、本当の産地直送の一撃を炸裂させた。

それは想像以上の臭さだった。

今になって、生地というものの凄さを思い知る。障壁のおかげである程度緩和されていた臭いの、その本性が牙を剥いた。卵臭の強烈に詰まつた風船が、目の前で爆発したようだ。咳き込まずにはいられない臭さに、彼は悶え苦しんだ。

苦しいはず。なのに、自然とペニスに手が伸びる。

彼はオナニーをしてしまつ。臭すぎる屁を臭いながら。

「……あは♪」

我慢汁を全体に広げながら自慰行為に励む彼に、ますますと愛おしさを感じる浅沼。帶びた愛液は彼の顔に滴り落ちる。

浅沼はさらに深く腰を落とし、尻たぶを両手で鷲掴んで広げて肛門を奥から覗かせ、高い彼の鼻に擦りつける。そして、ぬふう……と尻の穴で鼻をゆっくりと飲み込んでいく。

生温かい粘膜に支配されていく感覚。同時に、腸内の臭いがむおおお……と流れ込んでくる。

恒常的なオナラの臭い。嗅いでも嗅いでも新鮮なガスの臭いが鼻粘膜を刺激して止まない。

「ハア……ハア……！」

腰を上下に動かし、フェラチオするように肛門で鼻を舐る浅沼。肛門から発せられる刺激に、たまらない愉悦を覚える。

腹の蠕動音が聞こえる。深く腰を下ろして、腹に力を込める。

「……んううツー！」

ぶむうううううううう！ ぶほおおおおお！ プッスウウウウウウウウ！

籠もつたような音色と共に大量のガスが鼻腔に注ぎ込まれていく。鼻を通り抜けるガスは猛烈な卵臭さを残しながら、口の方へと抜けていく。生温かい強烈な屁を鼻と口の両方で味あわされるのだ。

肺まですっかりオナラ漬けにされる感覚に、ペニスの扱くスピードはますますと加速する。クチュクチュクチュクチュ——と粘着質な音色が響き渡る。

「ハツツ、ハツツ、ハツツ！」

息を切らしながら腰を上下させ、肛門で鼻を咀嚼する浅沼。腸液で滑りの良くなつた肛門は、ヌルツ、ヌプツと彼の鼻を舐る。そして、放屁欲求に苛まれるとすぐに、

「……ンうツー！」

ブピッ！ ぶむつぶぶスラッ！ むわああいいい……！

鼻をくわえ込んだまま強烈な一発をかます。夥しい猛烈な汚臭が、ますますと鼻腔を焼け野原にさせていく。あまりの臭さに涙が止まらない。

たが  
チンボヒスエンは止められない。まるで苦心に比例するかのように  
ニスを扱く腕はより強く、より速く動く。

屁に浅ましく興奮する彼に、浅沼はますますヒートアップする。

ほら もうと喰していいんだよ 私のくさあいオナニーへ 変態だもん  
ね、汚くて、く、くっさあい女の子ガスに興奮しちゃうんだもんね。最低ね、最  
低、最低。オナラ嗅がされてこんな風にお、お、オナニーしちゃうんだもんね。あ  
ふ、ふ、ふふふふ……ほ、ほら、追加のふうだよ」

「あんっ、すー」「すー」「すー」出ちゃつた、オナラ。お、お尻……ケツ穴から、いつぱ  
あい。ふふふふふ。あ、くつさあうい、オナラくさつ。もおー、お、オナラ好きな  
ら、残さず全部嗅がなくちやダメでしょ。何度言つたら分かるのかしら、き、君つ  
てば、あふふふ。ホントにダメダメな部下なんだから。ほ、ほら、オナラを嗅ぐー」  
とくらうしか能がない消臭器が、オナラも消臭できないなんて、ダメでしょ？ は  
あうい嗅いで嗅いでえー」

バススッ！ ぶぶつぱううくくううううう！ ぶりりつむすう

「アレ? アレ? あふふふ、なんだかちょっとぐつたりしてる? ダメだよお  
う、もつといつぱいオナラ出ちゃうんだから。私のお尻見ただけで、ち、チンポ勃  
つかやうくらい、鼻の奥までエツチなオナラを染み着かせるの。もう、私のオナラ  
以外じゃ、興奮しないように……」「うつて」

「ハア、ハア、もうと出るよ、オナラ……オナラ、もうと、ほら、オナラあ」

ブリッジアラウンド・ザ・ワールド! ブリッジアラウンド・ザ・ワールド!

愉悦の表情を浮かべながら彼を詰り、催して即、屁を放つ浅沼。とっくのとうに、肺の空気全ては浅沼のオナラと入れ替わってしまった。それほどの量のオナラを、彼は嗅がされていたのだ。

意識は朦朧とし、それでも自然と鼻が動く。快樂のみを求めて屁の臭いをオカズに手淫を続け、頬を弛緩させながら屁の臭いを楽しむのだ。

もうペニスは限界だった。グツグツと煮えたぎった精液が今までに鈴口から激しい勢いで噴射されようとしていた。

その様子は生の射精を田の当たりにしたことのない浅沼でも分かった。

「あ、出る？ 出ちゃいそう？ う、うふふ、田ちゃん、出ちゃうのね。し、白いオシッコ……」

彼が服従の証を示すその瞬間が近づいていることを悟り、浅沼は胸を激しく高鳴らせた。

それなり……。

「はうっ、んんううう……」「……」

今また催した屁を噴出させぬように我慢する浅沼。どうやら、屁を我慢することによって、ガスを圧縮し、濃度の高まつたオナラを一気に浴びせ、最低に無様な射精を経験させる魂胆らしい。

性的興奮に応じて催すガスを、無理矢理に堰き止め、圧縮する。腹部に生じた強烈な膨満感に幾度も肛門が弛みそうになるが、浅沼はそれでも屁を我慢し続ける。「ま、まだよお、まだダメよ」

そう言つて、苦悶の表情を浮かべる浅沼。

「今から一番……一番くつさあ〜いの嗅がせてあげるからあ。それまで射精しちゃ、ダメだから……ね？」

そう言われては我慢するしかない。

彼は浅沼のオナラ奴隸なのだから。

「でも、シコシコ、やめちゃダメだよ？ シコシコしながら、我慢して……？」

無茶な要求だったが、耐え抜くしかなかつた。彼は手淫を続けながら懸命に射精を我慢する。

しかし、容赦なく鼻腔を汚染する浅沼のオナラが、彼の淫欲をどうしよもなくそそる。残り香だけで、危うく絶頂に至りかけるのだ。彼女の屁を常時臭いながら、ペニスを扱き、それでも射精を我慢するなど、どれだけ固い意志があるうと至難の業というものだ。

早く……早く、嗅がせてくれ。

格別である。その放屁を――

彼の苦しむその様子にますますと嗜虐心を煽られる浅沼

「ほら、頑張って。ぐさういオナラ喰いで。おおチンホシヨで。でも、イニちやダメだよ？」ほら、もう少しだから……」

彼の鼻に押し当てた肛門がヒクヒクと小刻みに痙攣している。すでにいつ解き放たれたとておかしくない膨大なガス量が肛門への吶喊を繰り返していた。もうほんの少しの気の弛み、外部からの刺激でガスが暴発することは間違いない。

卷之三

「おほおッ！」

腸がねじくれたとしか思えないほどの異音が、浅沼のお腹から響き渡った。体内からのSOS。これ以上のガス我慢は不可能だという証左であつた。

ハハハ……いよいよ氣持ち良くなせてたけん、私の一翻ぐいせこの全部看の中に注ぎ込んであげるから、ね……

るよつこ感じた。

「あ、や、ダメ、そんな風にされたら……」

鼻による刺激に腰をくねらせる浅沼。中腰で屁を我慢しながら腰を振るその姿は、普段の清楚な彼女からは想像もつかない姿だった。

それは静かに産声を上げた。

まるで永久に続くかのように思われる——

すたじー屁であーが

窄まつた肛門から静かに、それでも凄まじい勢いで噴射されるすかしのオナラ。ねえつとりと生温かいガス塊が鼻腔の中へと注入されていった。

濃密に圧縮されたすかし二層

臭くなしはすかなかへた

彼は鼻に染みるよう感じられるほどの卵臭さにその身を魚のように跳ね返らせながら、ゴシュゴシュゴシュゴシュー——とペースを激しく扱き上げた。熱い滾りがゴボゴボと煮立ちながら、尿道を激しく駆け上つてくる。臭い、臭い、臭い臭い臭い臭い——しかし、彼にとつてそれが素晴らしいかった。

屁はまだまだ続く。浅沼のタンクに貯蔵されたガス量はこの程度で治まりのつぐものではなかつた。

「あ、あお……お、おほおッ……ん、ひイ……ッ！」

下品なアヘ顔を晒しながら、浅沼は栓を抜かしたビンのように、溜まつたガスを本能のままに垂れ流している。別にわざとすかしつ屁にしているわけではない。自然とすかしてしまっているのだ。

黄色く着色されているよう伺える。濃密たまごの底

すでに彼の鼻腔内で収まる量ではなく、浅沼の激臭ガスは空氣中に散布され、入った者を即倒せるほどの威力を誇っていた。

同の屁の轟う……。

濃厚屁を全身に溶かし、彼は快樂の海に浸つた。

ナミ  
○

腸内でたっぷりと圧縮されたオナラを存分に享受しながら、腰を突き上げ、ペニ

「おまかせ……イッてえ、イッていいの……よお？」

チンポを激しく扱き上げる彼を見て、濃密すかしつ屁を放ちながら浅沼は詰る。

「え、女奴隸の證明、激くさあういオナラでえ、おチンチン汁ぶちまけちや……」て

ブッシュュウウ～～～むすかあああああああああ～～～～～…ツ！

絞り出される熱い熱いすかしつ屁。

靈感的な腐卵臭、猛烈に臭うその屁に彼の意識は溶かされていく

間断のなしへ二つの快樂を禰に  
彼はしよしよ抗しよ、もなく——果てた

卷之三

激しい手淫に伴うように、噴水のような白濁が力強く噴き上げた。足を激しく悶えさせながら、脳天を貫く快感に頭の中を白に染めさせた。

「あ、あああ、す、すゞ、ホンマヤン君、おめでたす！」

生で見る初めての射精、断続的に噴射されるエリクルトが飛んでは散り飛んでは

「ほ、ホントに……私の、で、こんな……あはああ」  
歓喜に呼応するように浅沼の尻も祝砲を上げた。

ブリッブツビブウウウ———ツツツ———！

音有りの屁を下品にまき散らす。すかし屁よりには及ばないが、それでもほとんど遜色ない臭さを誇るオナラ。

猛烈な腐臭の温風を堪能しながら

最後に腰を大きく突き上げ、溜まりに溜まつた精液をまとめて四散させた。脳が溶解するのではないかと思われるほどの強烈な快感に、彼の意識はいよいよ消失寸前に陥った。

「はあ……はあ……はあああん……」  
腰をビクビクと痙攣させる浅沼。どうやら彼女もまた絶頂に至ったようである。(ふ、ふふ……ふふ……す、す)お、……)

胸の内で浅沼は思う。

(お、オナラで男禊るの……最高お……♪)

完全にSつ気を萌芽させたようだ。しかも、放屁による支配という、極めてマニアックな性癖だ。

涼子は立ち上がり、その豊満な所を見せつけながら彼を見下ろした。  
彼は朦朧とする意識の中、かるうじて女神を見上げた。

一  
卷之三

「いつちやつたね、変態くん」

飛ひ散つた精液に目をやりながら、浅沼は言つ

よく分かる。

「あなたはもう、私のオナラ奴隸よ。私のオナラのためになんだって言う」と聞いた

そうだ。

「あふふ、素直な良い子。……」褒美あげなくちやね

肛門を鼻に押し当てた。

一・お・や・す・み

ふうつすう

間抜けな音の浅沼の放屁。

彼はいよいよ意識を失つていった。

卷之三

浅沼の艶やかな笑い声を聞きながら